

顔のない鏡像

—『招かれた女』における他者—

菊地良夫

ボーヴォワール Simone de Beauvoir のテーマとなるのは自由とか他者であり、この観念的テーマの分析には、実存主義の視点から検討されるのが一般的である。『招かれた女』 *L'invitée* のテーマもまたそのタイトルの示すように「招待されたよその人、つまり他人」¹⁾であることは明白であり、その上、題辞として使われたヘーゲル Hegel の「おのおのの意識は他者の死を求める」 *Chaque conscience poursuit la mort de l'autre* という引用文が、この作品への接近法をますます実存主義哲学の視点へと向わせている。

ところで本稿で注目したことは、鏡あるいは鏡像の使用が単なるエクリチュールの装飾にとどまっているのであろうか、という点である。ボーヴォワールが用いた鏡や鏡像の手法がどんな役割を果しているのかを追跡するのが本稿の目的である。

スタンダール Stendhal の「小説、それは往来に沿って持ち歩かれる鏡である」 *Un roman: c'est un miroir qu'on promène le long du chemin*²⁾ に示されるように、鏡は現実の忠実な反映を示すものであったり、マニエリスムの鏡³⁾のように現実のゆがめられた反映であったり、その諸相は人間の歴史と共にさまざまな役割を果しつつ変遷している。時代をさかのぼれば、ギリシャ神話のナルシスは典型的な鏡のテーマを示すものである。ボーヴォワールと鏡については、オーデ Jean-Raymond Audet がナルシスムのテ

ーマなどと一緒に鏡のテーマが、作品に見られることを指摘しているが、それは主要テーマではなく、副次的テーマであると言及するにとどめている⁴⁾。視線と鏡の役割を指摘したガニユバン⁵⁾、あるいは、ムーニエ Emmanuel Mounier の援用によって、他者の視線のもつ「衝撃的視線」un regard bouleversant について語るジャカール⁶⁾等に見られるものは、ギリシャ神話のメドゥーサの視線が見る者を石化するというイメージに示される主体と客体との間に発生する物化現象についての実存主義的分析である。本稿の目的とするところは、実存的視線一見る一の行為に焦点をあてるのではなく、視線の反映—鏡—の役割についてである。メドゥーサの視線の興味深い点は、その視線それ自体で石化できるのではないこと、つまりメドゥーサを「見る人」がメデュースによって「見られる人」になったとき「メデュース現象」すなわち石化が完成するところにある。これこそ鏡の本質ではないだろうか。鏡それ自体は無の作用である。鏡像があって、はじめて鏡はその機能を発揮する。そこでは「見る人」は「見られる人」という無限反復が繰返されている。

I 理想鏡像

『招かれた女』の語り手、フランソワーズ・ミケル Françoise Miquel はルーアンの田舎からパリへ招き寄せた若い、特異な性格の娘、グザヴィエール・バジェス Xavière Pagès を殺すことによってこの小説の幕を下す役割である。フランソワーズが尊敬し愛するピエール・ラブルース Pierre Labrousse (自分の劇団を持ち、役者兼舞台監督) との間には、「僕らは一体だ」“Nous ne faisons qu'un”⁷⁾ という世界が作られており、お互いは肉体的恋愛も含めて一切干渉せず、自由に行動し、二人の間には一切の隠しごとがないという関係を結んでいた。

「いや、おしつめて言えばひとつの生活しかない。そのまんなかになにかがあって、それはピエールでも私のもなく、わたしたちという言葉でしか表現できないものなのだ」

(...) ou plutôt il n'y avait qu'une vie, et au centre un être dont on ne pouvait dire ni lui, ni moi mais seulement nous. (*L'Invitée*, p. 55.)

見る者（語り手）の世界と見られる者（ピエール）の世界が重ね合わさって、二人の間に立ちだかる不透明な存在がなくなったとき、フランソワーズの視線は他の事物を単なる光景に追いやってしまう。「非人稱的で自由な」*impersonnelle et libre* (*op. cit.*, p. 31) 存在としてのフランソワーズは、ダンスホールの真中に座りながら、「もしあたしが背を向ければ、たちまちそれら（踊りくるう人々）は見捨てられた光景のように雲散霧消してしまうだろう」*Si je me détournais d'eux, ils se déferleraient aussitôt comme un paysage délaissé.* (*op. cit.*, p. 31) と考えて、無邪気に自分が世界の中心であると信じている。それは「やはり《内面生活をもたず》、いつも世界の真只中にいると信じている（中略）、にもかかわらず主観性の真只中にとどまっている（中略）そんな子供たちを連想させる」*Cela fait penser aux enfants qui, eux aussi, 《n'ont pas de vie intérieure》 et croient toujours être en plein monde (...) mais qui n'en demeurent pas moins en pleine subjectivité, (...)*⁸⁾ 存在なのだ。ここに見られるフランソワーズの世界は、幼児期のナルシズムで満たされ、強い自己愛で支配された世界である。それを可能にしているのがピエールであり、彼女の意識は例外的で威信ある人物ピエールと同一化している。ラガーシュ D. Lagache の言う「英雄同一化」*identification héroïque* を行った自我である⁹⁾。フランソワーズの意識に見られる他者否定は、英雄化した自己主張の生みだしたものであろう。精神分析ではこのようにして形成されたものを「理想自我」*moi idéal* と呼んでいる。ラカン Jacques Lacan はその起源を鏡像段階 *stade de miroir* の概念に求める。幼児が鏡に映った自分の像を前にして、「こおどりしながらその鏡像を珍らしげに自分のものにする、また鏡像による同一化を我がものとするさいの遊戯的な自己満足」(---) *l'assomption triomphante de l'image avec la mimique jubilatoire qui l'accom-*

pagne, la complaisance ludique dans le contrôle de l'identification spéculaire(...) ¹⁰⁾ している事例に見られるように、フランソワーズに形成されたこうした意識像をわれわれは理想鏡像ということにしよう。

理想鏡像としてのフワソワーズの顔は次のように映る。

「他人みたいに狭い、ちっぽけな個人意識にとらわれないことを、誇らしく感じたものだった。」

(...) elle s'était sentie fière de n'être pas enfermée comme les autres dans d'étroites petites limites individuelles (...) (*L'Invitée*, pp. 161-162)

世界が自己の所有となっていると思うフランソワーズは「寛大で、公平な、不滅の観察者」ce spectateur indestructible, impartial et généreux (Merleau-Ponty, *Sens et non-sens*, p. 52) で「不安を与える他人の存在を眠らせようと試みる」(...) (nous) essayons donc de mettre en sommeil l'inquiétante existence d'autrui (*op. cit.*, p. 51) 存在として君臨する。作者自身の幼年期の思い出にも理想鏡像の芽生えが見られる。

「私は2歳6カ月で、妹が生れたばかりである。私は妬きもちをやいたそうだがでもそれも少しの間だった。おぼえている限りでは、私は長女であることが得意だった。いちばんということが。(中略)私は小さな妹をもっていた。けれどこのお人形みたいな赤ん坊は私を所有していないのだ。 (下線筆者)

(...) j'ai deux ans et demi, et ma soeur vient de paraître. J'en fus, paraît-il, jalouse, mais pendant peu de temps. Aussi loin que je me souviens, *j'étais fière d'être l'aînée : la première.* (...) J'avais une petite soeur : ce poupon *ne m'avait pas.* ¹¹⁾

ボーヴォワールと妹との対立不在は妹が彼女の世界の所有物であり、妹に

よって「見られる存在」l'être-regardé (A.-C; Jaccard, *ibid.*, p.105)になる恐れがなかったからである。

理想鏡像の意識はつねに他者の意識を否定しようと働く。他者の意識が事物化されたとき、その攻撃は中止される。攻撃の必要がなく、世界の中心にいて感じているときのフランソワーズは、寛大で、「けがれなく」*sans tache* (*L'Invitée*, p.121)「ほんとにこの世に存在しているとは思われない」*je ne peux plus croire que vous existiez pour de vrai* (*op.cit.*, p.121)とグザヴィエールに言われるほど、没個人的 *impersonnelle* な存在である。作者自身、主人公のフランソワーズには、「純粹に無色透明で、顔も個性もない」存在(下線筆者) *pure transparence, sans visage, ni individualité*¹²⁾を与えたと説明している。ここで「顔のない」存在に注目したい。理想鏡像は他者を事物に変えてしまうが、「見る人」の顔は「見られる人」としての他者を呑み込む顔として映るはずなのだとするならば、なぜフランソワーズの顔はなくなっているのだろうか。これは次のように考えられよう。フランソワーズがその目的を達したとき、つまりピエールの顔とフランソワーズの顔が合致し「英雄同一化」を行ったとき皮肉にも彼女個々の顔を失ったことに気付かずに、それに代る理想鏡像を自分の顔と思い込んでいたからである。

II 欲 動 鏡 像

人間が自己を見るためには、自己の実像ではなく、鏡像としての虚像によらなければならない。直接的に自己を見ることのできない以上、自己を見ようとするれば、現実的であれ、象徴的であれ、鏡像を必要とする。

「我々自身の発見は自分が一人だと知ることにより表明される。世界と我々の間には、無形の透明な壁、つまり我々の意識の壁が立ちただかっている。我々は生まれてまもなく<一人>だと感じるのは確かであるが、子供や大人はその孤独を超越し、遊びや仕事を通して、自分自身を忘れることができる。それに反して、幼児と青年の間をゆれ動く思春期の少年

は、世界の無限の富を前にして、一瞬呆然となる。彼は自己の存在に驚き、やがて驚嘆から内省が生まれる。つまり意識の川に身をのり出して、川底からゆっくり現れ出る水にゆがめられた顔が、己のものかどうか自問するのである。その存在の特異性—子供に見られる純粋な感情—が悩みと疑問、懐疑的な意識に生れ変わる。」¹³⁾ (下線筆者)

自我に目覚めるか否かの境界上にある人間の意識は両義性 *ambiguïté* であるとパス octavio paz は語る。自分が何者であるかの手がかりを与えるのも、包み隠してしまうのも、「透明な壁」としてあるいは懐疑へと誘う意識として、鏡像の成立に関与してくる。フランソワーズに危機が訪れたのは、彼女の「虚構の世界」*son monde factice* (Merleau-Ronty, *ibid.*, p. 57) を取囲む「透明な壁」に亀裂が生じ、懐疑的意識にとらわれたときである。

「《あたしはいったい何だろう?》 彼女はポールを眺め、露骨な感激を顔にあらわして、夢中で見物しているグザビエールを眺めた。あの女たちの名前はだれも知っているし、それぞれ自分の思い出、特別の好みと考えを持ち、顔の特徴があらわすように、ちゃんとときまった性格をそなえている。だが自分のことを考えて見ると、どうしてもはっきりした形が頭に浮んでこない。(中略)「けっして鏡を見ない」というグザヴェールの言葉は当たっている。自分の顔に注意すると言っても、いつも見覚えのないものとして扱うだけだった。(中略)

フランソワーズは自分の顔にさわってみた。何もないのっぺりした仮面としか思われない。」(下線筆者)

— Qu'est-ce que je suis? se demanda-t-elle; elle regarda Paule, elle regarda Xavière dont le visage rayonnait d'une admiration impudique; ces femmes-là, on savait qui elles étaient; elles avaient des souvenirs choisis, des goûts et des idées qui les définissaient, des caractères bien arrêtés que traduisaient les traits de leurs figures; mais *en elle-même Françoise ne distinguait aucune forme clai-*

re; (...) Elle ne se regarde jamais, avait dit Xaviere; c'était vrai; *Francoise n'était attentive à son visage que pour le soigner comme un objet étrangère*; (...)

(...) elle toucha son visage: ce n'était pour elle qu'*un masque blanc*. (*L'Invitée*, pp.161-162)

作者自身は次のように解釈している。ピエールやグザヴェールとの関係に孤独を感じたフランソワーズは、他者にはではなく「自分の中に救いを求めようとしたが、どうしても見出せない。彼女には文字どおり自我がなかったのだ。純粹に無色透明で、顔も個性もない存在だったのだ。」(...) elle cherchait en vain du secours en elle-même: elle n'avait littéralement pas de moi. Elle était pure transparence, *sans visage* ni individualité. (*La force de l'âge*, p. 347) (下線筆者)。フランソワーズが「顔のない鏡像」を持つに到ったのは、世界からの逃避によるのではなく、むしろ「世界の実体を解明することを自己の絶対的使命」(...) du monde qu'elle avait pour impérieuse mission de dévoiler. (*La force de l'âge*, p. 347) としたために「自分をすべてと一体化」se confondant avec tout (*op.cit.*, p. 347) しようとするところから生じたものである。それによって、ピエールとフランソワーズの顔はぴったりと重ね合うが、しかし、それはフランソワーズが英雄視しているピエールの方に合わせたことによるのだ。ピエールとの間に亀裂を感じ取った時、この合成された顔はそれぞれ元の位置に戻る。ところがピエールは相変らずその顔を持ち続けるのに対して、フランソワーズは「無色透明で顔もない存在」すなわち自我を失っていたことに気付くのである。それまで彼女の意識は「無形の透明な壁」として彼女を包みこんで保護していたが、この虚構の世界が破れたとき、意識は敵意ある他者の提供者に変貌する。「顔のない鏡像」に気付いて呆然としているフランソワーズは真にとり戻すべき自分の顔を求めることよりも、ピエールを引き留めることができる顔—フランソワーズにはそのような顔が失なわれているのだから他人の顔—つまりグザヴィエールの顔を仮面として身につけようとする。

ブロッホ Ernst Bloch は「自己観察による私」Selbstanschauung Ich¹⁴⁾と名付けたマッハの自画像デッサンについて語っている。マッハは鏡を用いないで自画像を描いたから、必然的に首から上は白紙となる。「首なし、それが自分で自分を見たときの人間というものである」(...) ein Ohnekopf, ein Decapite ist der angeschaute Mensch vor sich selbst. (op.cit., p.14)とブロッホは解釈する。他者の眼に曝されると、「首のある」人間像とならざるを得ないのに、皮肉にも自分の眼では自分の顔が見えない。「眼は自分で自分を見ることができない」というコント Auguste Conte.の言葉¹⁵⁾にもみられるように、「他人が自分を見知っているとおりに自分をみることはできない」Erst recht sieht sich keiner so, wie ihn die anderen kennen (Bloch, *ibid.*, p.13)とこころに意識の両義性がかかわってくる。テープに録音された声と、話している自分の声とは同じ人間の声でありながら本人には異なって聞えるように、他者からみた自己と内からみた自己は絶対に一致しない。他者のつくる「自己の鏡像」と自己のつくる「首なし鏡像」との間の異化作用は避けられない。ピエールとの間に生れた亀裂によって、他者の眼によってつくられた「理想鏡像」を失ったフランソワーズには、「首なし自画像」の何も描かれていない白紙のような状態として、主体的な自己を見るチャンスが訪れたのだ。「顔のない鏡像」の不安な状態におちこんだフランソワーズは、このときどんな方法を取ったのであろうか。

「今日になってやっと、ピエールが彼自身のために生きていることを悟った。軽はずみな信頼のむくいとして現われたのは、ピエールが一足飛びに赤の他人になったことだ。(中略) いまピエールに接近できる唯一の道はグザヴィエールとまた一緒になって、ピエールの眼で彼女を見ようとする事なのだ。

(...) elle s'avisait aujourd'hui qu'il vivait pour son propre compte, et la rançon de sa confiance étourdie, c'est qu'elle se trouvait soudain en présence d'un inconnu. (...) La seule manière dont elle pût se rapprocher de Pierre, c'était de rejoindre Xavière et d'essayer de

la voir comme il l'avait vue. (*L'Invitée*, p.146)

グザヴィエールの出現によって崩壊した理想鏡像の世界のかわりに、ピエールとグザヴィエールの世界に自分も入り込んで、三人による一つの世界をつくり、それによってピエールとの絆を残そうとフランソワーズは考える。なぜなら、理想鏡像の立場では「グザヴィエールがフランソワーズの生活の一部としか思われなかった」(...) *Xavière n'apparaissait à Françoise que comme un morceau de sa propre vie* (*L'Invitée*, p.146) のだが、今やフランソワーズが世界の一部にすぎず、ピエールとグザヴィエールの世界からはみ出しているのだ。そこでフランソワーズによって考え出されたトリオ(三人組)はピエールをめぐるフランソワーズとグザヴィエールという三角関係ではなく、フランソワーズとグザヴィエールもまた愛情で結ばれる関係である。「固く結ばれた二人の仲だけでも結構な話だけど、三人が心からお互いに愛し合うなら、もっと豊かなものになるわ」*Un couple bien uni, c'est déjà beau, mais comme c'est plus riche encore trois personne qui s'aiment les unes les autres de toutes leurs forces.* (*op.cit.*, p.231)そしてこのトリオを維持して行くための条件も決められる。それは「独占欲」*exclusivisme* (*op.cit.*, p.325)をトリオの中に持ちこまないことである。しかしこのトリオもたちまち崩壊への道をたどる。それはグザヴィエールが原因であるかのように展開する。彼女は「瞬間にばかり生きているので未来と言えはみんな夢に思われ」(*Vous êtes tellement dans l'instant que n'importe quel avenir vous apparaît comme un rêve* (*op.cit.*, p.119), 思いのままに嫉妬し、勝手気ままに行動する。「信じるのは馬鹿だと思わ。手でさわるもの以外に、たしかなものなんて、ひとつもありわせせんわ」*Je trouve ignoble de croire, il n'y a rien de sûr, que ce qu'on touche.* (*op.cit.*, p.269), 「でもあたし純粋なものが嫌いなんですもの」*Mais je hais la pureté* (...) (*op.cit.*, p.269) とグザヴィエールはうそぶく。

「あの子はなんて自由な身分だろう。心も自由なら、考えも自由、苦しもうと疑おうと、憎もうと、勝手気まま。過去とか、約束とか、自己に

対する誠実さと言ったものにいささかも縛られずにすむのだ。」

Comme elle était libre! Libre de son cœur, de ses pensées, libre de souffrir, de douter, de haïr. Aucun passé, aucun serment, aucun fidélité à soi-même ne la ligotait. (*L'invitée.*, pp. 308-308)

グザヴィエールのこうした行動はトリオの調和を破り、フランソワーズやピエールと衝突する。しかしピエールが「かわいい黒真珠」une petite perle noire (*op. cit.*, p. 144)とあだ名して、グザヴィエールに魅せられたのはまさにこうした意識の深層にあるマグマ的なエネルギーだったのだ。グザヴィエールは本能的な欲望に身をゆだねて、あらゆる抑圧から自由である。フロイトが広い意味で使う「欲動¹⁶⁾」pulsionこそグザヴィエールのエネルギーと言えよう。彼女を支配するのは「生物学的欲求」besoin biologique (*op. cit.*, p. 58)とみることができる。グザヴィエールの鏡像を「欲動鏡像」と呼ぶことにしよう。

グザヴィエールの発するエネルギーを嫉妬とかエゴイズムと名付けて、悪のレッテルを貼り付けるのは、フランソワーズとピエールの理想鏡像の世界から見た、異質な世界の存在に対する拒絶反応にすぎない。理想鏡像の世界に必然的につきまとう他者否定の攻撃なのだ。しかし、歴史的(時間)、社会的(空間)な制約のおよぼない、生物学的欲求に支配される、人間内奥の欲動としてのグザヴィエールには他者からの攻撃は無意味となる。内部から襲ってくるこのエネルギーは、ある行動によって放出されるのを待つ以外にはどうしようもない、「途方もなく曖昧模糊」(des êtres) (...) grandioses dans leur indétermination (*op. cit.*, p. 362)とした存在である。欲動鏡像は、内からしか見ることでできない「顔のない鏡像」といえよう。

「「あの子があたしのような意識を持っていることがふと分ったからよ。あなたもおありになって? 他人の意識を、何と言いましょうか、内かわから感じたことが?」 (中略) 「とても我慢できないものよ」」

C'est parce que j'ai découvert qu'elle avait une conscience comme

la mienne; est-ce que ça t'est déjà arrivé de *sentir comme du de-
dans la conscience d'autrui?*(...) C'est inacceptable, tu sais. (*L'In-
vité*, p. 323) (下線筆者)

今や「顔のない鏡像」となっているフランソワーズは、グザヴィエールの意識が内から見える状態になっている。ここでフランソワーズの取った行動とは、何食わぬ顔でグザヴィエールの恋人ジェルベール Gerbert の腕に身を任せて、グザヴィエールを裏切り、ピエールにはグザヴィエールに対して表面的に友情を保つふりをさせてグザヴィエールをだまし続けようとしたことだった。しかし真相が曝露され、

「先生（フランソワーズ）は、ラブルッス先生（ピエール）があたしに惚れたんで嫉妬したんだわ。ラブルッス先生をそそのかしてあたしを嫌うようにしむけたあげく、まだあき足りないで、ジェルベールまでも横取りしたのね」

Vous étiez jalouse de moi parce que Labrousse m'aimait. Vous l'avez dégouté de moi et pour mieux vous venger, vous m'avez pris Gerbert. (*op. cit.*, p. 437)

フランソワーズはグザヴィエールが犯したであろうような行為を演じてしまったのである。まるで立場が逆転したのだ。ただグザヴィエールの推理の中にある間違いは、以前のフランソワーズならば意識的な術策で行ったであろうことを、卒直な衝動によって無意識的に行動したことだ。「この無邪気な愛がどうして汚らわしい裏切りになったのだろうか？」Comment cet amour innocent était-il devenu cette sordide trahison? (*op. cit.*, p. 438)とフランソワーズは自問する。これこそむしろグザヴィエールの発すべき言葉なのだ。

真にエゴイストで、いかなる抑制からも解放されて、瞬間に生きるグザヴィエールの行動がピエールとフランソワーズの間に引起してきたものこそ、

この種の事件なのである。邪心とか悪意の持主で、邪悪な存在とフランソワーズから決めつけられるグザヴィエールは歴史や社会に支配される他者の世界からほど遠い原初的エネルギーの世界に閉じ込めている。

「—いったいどんな暮しが理想的だと思うの？ とたずねる女（フランソワーズ）の声はあたたかだった。

—小さいときみたいに暮したいの。

—何もしないでも、向うからやってくるような？ お父さんに大きな馬に乗せてもらったときみたいに？

—ほかにもいろんなときがありましたわ。朝の6時に猟につれて行かれたときは、つやつやした蜘蛛の巣が草の上に一面に張ってあったわ。なにもかもとても強烈でしたわ。」（下線筆者）

—Comment faudrait-il que ce soit, la vie, à votre idée? demanda-t-elle avec bienveillance.

—Comme c'était quand j'étais petite, dit, Xavière.

—*Que les choses vous saisissent sans que vous ayez à les chercher?* Comme lorsque votre père vous emportait sur son grand cheval?

—Il y avait un tas d'autres moments, dit Xavière. Quand il m'emmenait à la chasse à six heures du matin et qu'il y avait sur l'herbe des toiles d'araignées toutes fraîches. *Tout me faisait si fort.* (*L'invitée.*, p. 38)

グザヴィエールの理想が幼児期のまったく自由気ままな、生命の原初的エゴイズムにあったことは明らかである。ジャカールは「この〈他者〉の顔は《魅惑的な表情》をした《汚れなき子供の顔つき》をしているだけのことだ」le visage de l'Autre n'est qu'une «honnête figure d'enfant» aux «traits charmants» (A-C Jaccard, *ibid.*, p. 107) と表現するが、フランソワーズが「無邪気な愛」と呼んだのも、悪意のない幼児的なエネルギーに彼女が身をゆだねたからである。このことはフランソワーズのなかにいつのまにか、

グザヴィエールの鏡像が入り込んでいたことを示している。人間存在の内奥では無邪気なマグマであっても、ひとたび意識の段階に昇ってくると、「あたしは嫉妬して、ジェルベールを横取りした」《J'ai été jalouse d'elle. Je lui ai pris Gerbert.》（*L'Invitée*, p.437）「永遠にそれがあたしの姿なのだ」《C'est moi pour toujours》（*op.cit.*, p.437）として罪人の烙印をフランソワーズ自身が意識する。フランソワーズは二者択一をせまられる。罪人の顔を永遠に自分のものとするか、それともそれを捨てるか。

「グザヴィエールが活着している限り、裏切りの罪は消えない。生身の存在として罪ある私の顔がここにゐるのだ。

「この顔を葬ろう。」（下線筆者）

Xavière existait, la trahison existait. Elle existe en chair et en os, *ma criminelle figure.*

Elle n'existera plus.（*op.cit.*, p.438）

フランソワーズが葬ろうとした自分の「罪ある顔」とは何を意味するだろうか。嫉妬による裏切りの罪を意識化させる存在はグザヴィエールなのだが、グザヴィエールでなくフランソワーズ自身の顔を葬ろうとする。しかし、それは自殺ではなくて、グザヴィエールを殺すことなのだ。この矛盾は鏡像によって解決できよう。「この顔」とはフランソワーズが理想鏡像を喪失したあとの、グザヴィエールの欲動鏡像のことなのである。欲動鏡像は生物学的欲求が支配する、自我や超自我の深部にある世界でつくられる「顔のない鏡像」なのだが、この顔のない、意識の奥にある欲動鏡像はグザヴィエールのものであって、自分の鏡像としては受入れられないとフランソワーズは理解したのである。グザヴィエール殺人とは、無意識の世界の生々しい欲動の葛藤、すなわちフランソワーズが一度受入れたグザヴィエールの欲動鏡像としての仮面を自分自身から再び剝そうとすることを、むしろ象徴的に表現した事件なのである。

III エ ス 鏡 像

もし鏡に映る自分の顔を絶対に見えないようにするにはどうしたらよいだろうか。鏡を叩き割る方法は？ これでは多数の顔をばらまくだけだ。鏡の裏の艶消しの朱を剝離してしまったらどうだろう？¹⁷⁾ そうすれば、もはやそこには透明なガラスしか存在しなくなる。では透明なガラスの存在は何を意味するのだろうか。ガラスの置かれる時間、空間の条件によって、透明なガラスも鏡に変化する¹⁸⁾。しかしここではあくまでも透明なガラスという条件での人間の反応を考えることにしよう。透明なガラスは、その前の存在物になんらの働きかけもしない。つまり他者の意識の援助がない状態なのだ。自己を見ようとする者は、このガラスの前では、自己の内奥の眼によって見ることになる。あの「首のない自画像」のように「顔のない鏡像」によって自己を見ることになる。

さてこの鏡性の剝奪をフランソワーズのグザヴィエール殺人に重ね合わせてみよう。フランソワーズが象徴的には人間として最大の悪である殺人行為に追い込まれたことが示すように、彼女にとって、仮面としての欲動鏡像は本質的に理想鏡像と異っていて、はるかに剝離することの困難な仮面なのである。いったんは英雄化し、同一化した他者（フランソワーズにとってはピエール）に対し、主体の自己同一化が不可能になった時点で、理想鏡像は再び他者の仮面となり、やすやすと剝れ落ちる。ところが、欲動鏡像は生物学的欲求に根ざしており、意識の支配できない本能的エネルギーの世界に存在する。明確な姿もなく、いかなる手がかりもないこうした自己の深部にある存在を剝出するのはほとんど不可能であろう。しかし、もしその存在、目には見えない「顔のない鏡像」ではあるが、その内的鏡性を剝奪したらどうだろうか。ちょうど鏡の裏をなくすように。フランソワーズはこのような方法によって自己の無意識の世界に動めく「生物学的欲求」による存在を他者の仮面とみなして自己から分離しようとする。しかし、無意識の世界でフランソワーズの一部分となっているこのような存在は、単に外から借りた仮面ではなく、事実上彼女の中で血肉化しているものなのだ。このような自己の一部分を剝

離するには、もはや「魂の中の死」la mort dans l'âme による方法しかない。フランソワーズのなにかが死んだのである。

「あたしははじめて完全に自分自身になった。やっとのことでどちらか選んだ。自分を選んだのだ。」

(...) plus rien ne la séparait d'elle-même. Elle avait enfin choisi. Elle s'était choisie. (*L'Invitée*, p. 441)

「完全に自分自身」になったフランソワーズとは一体どんな存在なのだろうか。すでに理想鏡像を捨て、他者の意識によって作られる「表層自我」moi extérieur (A.-C. Jaccard, *ibid.*, p. 132) からは解放されている。さらに欲動鏡像をも排除して「深層自我」moi profond (*ibid.*, p. 132) の中にある生物学的欲求も剔出した。残されたものは何であろうか。理想鏡像や欲動鏡像のさらに深部にあり、欲動エネルギーの「大貯蔵所」le grand réservoir (J. Laplanche et J.-B. Pontalis, *ibid.*, p. 57) でもあり混沌と無意識の世界である精神分析学で言う「エス」Es そのものであろう。フランソワーズに残され、そして見出されたこの存在の鏡像をエス鏡像と呼ぶことにしよう。

ボーヴォワール自身の声に再び耳をかたむけてみよう。

「ピエールにたいする愛によって、従属の状態に閉じこめられていたフランソワーズを、犯罪によって解放したことは、私自身の主体性を取り戻させたのだった。」

(...) en déliant Françoise, par un crime, de la dépendance où la tenait son amour pour Pierre, je retrouvai ma propre autonomie.

(*La force de l'âge*, pp. 348-349)

作者自身の分析に見られるように、「犯罪」は「主体性」の獲得のためだった。フランソワーズはかくして、理想鏡像、欲動鏡像を次々と捨て去ることによって、今や裏を削り取られ、「表裏がなくなり、爽やかな実存物」(多

田智満子、「前掲書」p.59) となった鏡を前にした「顔のない鏡像—エス鏡像」となり、まるで透明なガラスのように「爽やかな実存物」としての主体性を取り戻したのである。

おわりに

フランソワーズのたどった鏡像、理想—欲動—エス鏡像のそれぞれの変遷は自我の完成をめざす意識の戦いの過程であった。しかしフランソワーズの到達した地点がエス鏡像であるということは、無意識の世界では自我は形成されないにもかかわらず、この意識の支配の及ばないところで自我の完成を見るという矛盾を感ずるかも知れない。事実、エス鏡像では何一つ自我は生れていない。つまり自我の完成はエス鏡像を出発点とすることを確認しているのが『招かれた女』のテーマなのである。この作品がボーヴォワールの処女作であることも、作家の方向を決定づける重要な意味を持つことになる。自我の問題は未解決のまま残されたが、エス鏡像を得たということは、他者と自我に関わる基本的な土台作りが完成したことを意味したのである。

ところでこの作品の分析から色濃く感じ取ることができたのはフロイトあるいは精神分析学派の影響である。実存主義哲学がフロイトから多くのものを学び取っていることからすれば予想されたことかも知れない。しかし鏡像の分析を行っている過程で、思いもかけず浮び上ってきた精神分析学の影響は、ボーヴォワールの作品を実存主義哲学のふるいにかけて精神分析学に直接結びつけて理解することの可能性を示すものではなからうか。

注

- 1) Laurent GAGNEBIN, *Simone de Beauvoir ou refus de l'indifférence*, éd. Fishbacher, 1968, p. 92.
- 2) Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, in *Romans et Nouvelles* éd. Bibliothèques de la Pléiade, Gallimard, 1952, p. 288.
- 3) 川崎寿彦『鏡のマニエリスム ルネサンス想像力の側面』研究社, 昭和53年。
- 4) Jean-Raymond AUDET, *Simone de Beauvoir face à la mort*, éd. L'Age

- d'Homme, 1979, p. 135.
- 5) Laurent GAGNEBIN, *ibid.* p. 94.
 - 6) Annie-Claire JACCARD, *Simone de Beauvoir*, éd. Juris Druck+Verlag, Zurich, 1968, p. 105.
 - 7) Simone de BEAUVOIR, *L'Invitée*, éd. Gallimard, 1970, p. 170. ボーヴォワールの作品からの引用は出版社、発行年に変化がない限り、作品名とページ数のみを本文中に（ ）内で示す。
 - 8) Maurice MERLEAU-PONTY, *Sens et non sens*, éd. Nagel, 1966, p. 53.
 - 9) J. Laplanche et J.-B. Pontalis, *Vocabulaire de la psychanalyse*, Presses Universitaires de France, 1967, p. 256.
 - 10) Jacques LACAN, «Propos sur la causalité psychique», in *Ecrits*, éd. Seuil, 1966, p. 185.
 - 11) Simone de Beauvoir, *Mémoires d'une fille rangée*, éd. Gallimard, 1958, p. 9.
 - 12) Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, éd. Gallimard, 1960, p. 347.
 - 13) Octavio Paz, *Le labyrinthe de la Solitude Suivie de Critique de la Pyramide*, Gallimard, 1972, p. 11.
 - 14) Ernst BLOCH, «Selbstopträt ohne Spiegel» in *Verfremdungen I*, Suhrkamp Verlag, 1977, p. 14.
 - 15) 山岸健, 「日常の世界と人間」, 『現象学的社会学』三和書房, 1985, p. 5.
 - 16) J. Laplanche et J.-B. Pontalis, *ibid.*, p. 359.
 - 17) 多田智満子『鏡のテオーリア』大和選書, 1985, p. 59.
 - 18) 寺田光徳「マラルメの鏡」, 『フランス語フランス文学研究』No. 39. (日本フランス語フランス文学会), 1981 p. 71. 陽光が差し込むと「窓」ガラスは鏡と化す例をマラルメの詩から取り出し分析する。論文は、形而上学的鏡, 精神分析的鏡, エクリチュールの鏡という展開によって, マラルメの詩的世界を鏡と鏡像によって分析している。

(筆者 岩手大学人文社会科学部助教授)